米帝 ・ イスラエルによるパレスチナ人民虐殺弾劾

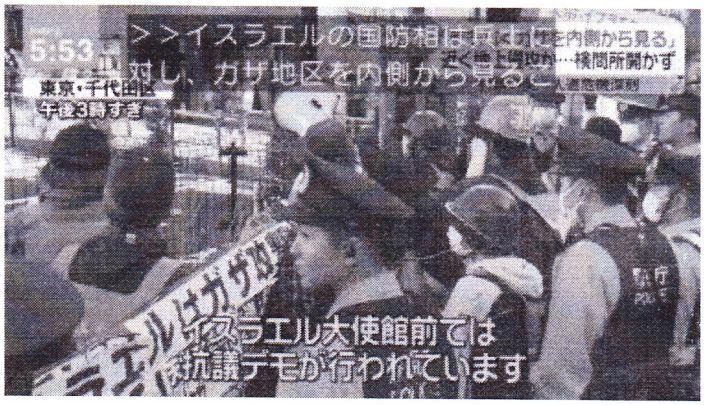
1.8イスラエル大使館弾劾デモへ！

イスラエル大使館弾劾!
1.8 パレスチナ人民連帯デモ
1月8日(月・休) 12:15集合 12:30デモ出発
集合場所：外濠公園(市ヶ谷駅1番出口そば)

イスラエル軍は10月27日にこれまでの部分的、一時的侵攻から、ガザ市に向けた本格的侵攻を開始した。10月31日、11月1日イスラエル軍はガザ市近郊のジャバリヤ難民キャンプを空爆し50人以上を虐殺した。 また病院や救急車にも無差別に激しい攻撃が加えられている。ガザ市最大の病院シファ病院を「ハマスの拠点」と称して攻撃し病院を包囲し物資補給を絶った。パレスチナでの死者は既に2万人を超えたという。

米帝バイデンは「病院は守られなければならない」などと「人道主義」の体裁を取ろうとしているが、「イスラエルの自衛権の支持」を第一に掲げる米帝の主張は全くの欺瞞でしかない!

実力闘争・武装闘争で闘うパレスチナ人民との武装連帯で、日本の地からも実力・武装で岸田政府を打倒する事こそ戦争を止める唯一の道である。1.8パレスチナ人民連帯のイスラエル大使館に進撃するデモに共に立ち上がろう!



パレスチナ人民虐殺戦争粉砕!

10月7日のハマスを始めとした部隊による急襲直後の9日、イスラエル国防省ガラントはガザを「完全包囲」すると発表し、「我々は動物たちと闘っており、それに応じて行動する」と言い放った。この極悪の人種差別主義によるジェノサイドを断じて許してはならない。人民虐殺戦争粉砕の国際連帯闘争を勝ち取ろう!

11月5日イスラエル政府のエルサレム問題担当相で極右

イスラエル大使館に対する
実力抗議闘争
(上10／20、左11／20)

全国反帝学生評議会連合
杉並区下高井戸1-34-9　03-3329-0168
Anti-InperiarismStudentCouncil@outlook.com
日大反帝学評X
@NU19680523

政党に所属するエリヤフは地元ラジオのインタビューで「原爆を使用すべきか」と問われ、「一つの選択肢だ」と答えた。さらに240人の人質について、「戦争には代償がある」と、人質を見殺しにしてでもパレスチナ人民の抹殺と核攻撃に突撃すると主張した。そしてネタニヤフは、このエリヤフを短期間の「閣議出席凍結」処分とし、この発言を容認した。これら一連の動向が、米帝並びにイスラエル・シオニストによるパレスチナ人民抹殺という戦争目的をハッキリと示している! これを許さない闘いに立ち上がろう。

11月8日に発表されたG7外相会談の声明の一つに、「イスラエルとパレスチナ国家が共存する「二国家解決が唯一の道」である事を強調するとある。これは「1948年占領地」「1967年占領地」をはじめとするイスラエル「建国」と、それ以降の4次にわたる中東戦争と入植地拡大によるイスラエルの占領地の確保を意味している。この被占領地への「帰還」を求めるパレスチナ人民の闘いを圧殺しない限り、イスラエル国家は存立しえないのだ。だからこそイスラエル・シオニストは1947年の国連「パレスチナ分割決議」も、また93年の「オスロ合意」も踏み越えて、占領地の拡大を図ることで延命を狙っている。 そして米帝をはじめとした帝国主義諸国は、中東における反革命の拠点としてのイスラエル政府・軍の白色テロルを支持し続けている。すなわち、「二国家解決」とはこの歴史を継続し拡大することしか意味しないのだ。G7はイスラエル・シオニストによるパレスチナ人民抹殺攻撃を、既成事実を追認しながら容認しているのだ。

日帝首相岸田は政治基盤の弱さから、戦争突撃でもって首相の座にしがみつくというブルジョワ政治家の腐り切った姿を晒している。実際には自衛隊をはじめとした権力機構が戦争遂行のための演習や組織再編を進めている。パレスチナを巡っては自衛隊機をジプチやヨルダンに派遣し「邦人退避」という形で戦争に参戦しているのだ。それを隠して、「経済、経済、経済」を連呼している。その現実と口先との大きな落差が排外主義扇動・襲撃を通してファシストが安倍以上に生み出される背景を作り出している。

このことを直視し、日帝の朝鮮・中国、アジアでの侵略・虐殺・植民地支配を全面的に開き直る右翼・ファシストを撃滅しよう! 日帝岸田の全面的な戦争突撃と対決し、闘うパレスチナ人民との武装連帯を勝ち取ろう! 自国政府打倒、帝国主義軍隊解体、ファシストせん滅戦の闘いの爆発を勝ち取ろう!

非公然・非合法解体攻撃粉砕! 組織壊滅攻撃を打ち破ろう!

11月1日、警視庁公安部は、我々解放派の同志を「有印私文書偽造・同行使」罪で不当逮捕した。「ホテルに偽名を使って宿泊した」という容疑での令状逮捕だ。

この弾圧は、4.20弾圧から8.14再逮捕と続く「私文書」罪の乱発攻撃だ。そしてこの弾圧はパレスチナ人民虐殺のさなか「革労協はG7外相会合に反対の声明を出している」などのキャンペーンと一体の政治弾圧であり、革労協に照準を絞った組織壊滅攻撃である。

同志の完全黙秘・非転向の闘いに打ちのめされた警視庁公安は11月10日、DNA鑑定―血液採取を強行した。公安デカは、東京簡裁に令状を出させておいて、同志を「検事調べ」とだまして連れ出した上で警察病院に連行し、5人がかりで暴力的に体を押さえつけて血液採取を強行した。そもそも血液採取には「鑑定処分許可状」と「身体検査令状」の両方を示さなければならないが強制採取する直前に「鑑定処分許可状」をアリバイ的に見せただけである。そもそも「私文書」罪での血液採取は前代未聞である。

でっち上げ弾圧に使うためのDNA鑑定を強行した警視庁公安を絶対に許してはならない。

血液採取・DNA鑑定強行に対して報復しよう。我々は、11.27警視庁本庁弾劾、12.21血液採取を実行した警察病院に対する弾劾行動を闘い、獄中―獄外貫く闘いで同志を我が戦列へ奪還した。

弾圧の下手人公安警察に報復しよう! 国家権力による全体重をかけた解放派壊滅攻撃を打ち破ろう!

反革命革マルは、革共主義から繰り出される「民族解放闘争」や「イスラム国家としてのパレスチナ国家樹立」に埋没しながら、パレスチナ人民と連帯する労働者人民の闘いに反革命介入し破壊・攪乱を策動している。

革マルによるパレスチナ人民連帯闘争の破壊を許さず、同志中原虐殺報復46ヵ年の怒りも新たに反革命革マル解体・絶滅戦に起とう。

闘うパレスチナ人民と連帯して、イスラエル大使館を直撃する戦闘的デモに立ち上がろう! すべての学生・労働者人民はともに闘おう!

(2023.12.24)